

イリインスキー、パーヴェル（父称は不詳） 神父
ヘルツェンシュトゥーベ（名前と父称は不詳） ドイツ人医師、七十歳
ワルヴィンスキー（名前と父称は不詳） ゼムストヴォの勤務医
マクシーモフ（マクシームシカ、名前と父称は不詳） トゥーラ県の地主、六十歳
ペルホーチン、ピョートル・イリイチ 官吏
ブラストゥーノフ、トリフォン・ボリーソヴィチ（ボリースイチ） 宿屋の主人
アンドレイ（父称と姓は不詳） 御者

カラマーゾフの兄弟——四部とエピソードの小説

アンナ・グリゴリーエヴナ・ドストエフスカヤに捧ぐ⁽¹⁾

まことに、まことにあなた方に言う。

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

——『ヨハネによる福音書』第十二章第二十四節^[1]

作者より

わが主人公、アレクセイ・フョードロヴィチ・カラマーゾフの伝記を始めるにあたって、私はいささか戸惑いを感じている。つまり、アレクセイ・フョードロヴィチをわが主人公と呼びはするものの、彼がおよそ偉人でないことは私自身よく承知しており、それゆえ、次のような質問が発せられるのは避けられまいと予見できるからだ。あなたはアレクセイ・フョードロヴィチを主人公に選んだわけですが、いったい彼のどんな点が非凡だというのでしょうか？ 彼は何をなしとげたんですか？ 誰に、どんなことで知られているんでしょう？ 一読者である私が、なぜ彼の生涯の事績の研究に時間を費やさなければならないのでしょうか？

最後の質問はとりわけ重大である。というのも、それに対しては「小説をお読みになれば、おそらく、おわかりになるでしょう」と答えるほかないからだ。だが、小説を読み終えてもわかってもらえず、わがアレクセイ・フョードロヴィチが注目すべき人物であるということに同意してもらえないとすれば？ こんなことを言うのも、悲しいかな、それが予測できるからである。私にとって彼は注目すべき存在だが、それを読者に首尾よく証明できるかどうかとなると、まったく自信がない。問題は、これがおそらく実践家^[1]であるが、正体はつきりせず、とらえどころのない実践家だという点にある。もっとも現代のような時代において、人間に明確さを要求するのはおかしなことかもしれない。ただ一点、たぶん、

かなりはつきりしているのは、これが風変わりな人間で、奇人ですらあるということだ。だが、風変わりだとか、奇人だとかいうことは、世の注目を浴びる権利を彼に与えるよりは、むしろ不利に作用する。人がみな特殊性を総合し、全般的混乱の中にせめて何らかの普遍的な意味を見いだそうと努めている時代にあつてはなおさらのことだ。奇人はたいいて特殊で孤立した存在だからである。そうではないだろうか？

もしあなたがこの最後の命題テメに同意なさらず、「そうではない」とか、「必ずしもそうとは言えない」とおっしゃるならば、私はわが主人公アレクセイ・フォードロヴィチの意義に関して、あるいは大いに勇気づけられるかもしれない。それというのも、奇人が《必ずしも》特殊で孤立した存在とはかぎらず、それどころか、ことによると、彼こそがときとして全体の核心を一身に体現していて、彼以外の同時代の人々はみな、何やら突風にあおられて一時的になぜか奇人から引き離されてしまったのかもしれない、そんなことがまあるからだ……

けれど、私としてはこんなおもしろくも何ともない、漠然とした解説に深入りせずに、序文などなしに、あっさり話を始めればよかつたのかもしれない。お気に召せば——その場合は、そのまま最後まで読んでもらえるだろう。ところが、困ったことに、私の伝記は一つなのに、小説の方は二つなのだ。重要なのは二番目の小説で、これは現代、ほかならぬ現在の時点におけるわが主人公の活動を描いている。第一の小説が扱っているのはもう十三年も前のできごとで、これはほとんど小説ですらなく、青春に足を踏み入れたばかりのわが主人公の一期を取りあげているにすぎない。第一の小説がなければ、第二の小説の多くが理解できなくなってしまうので、これを省いてしまうわけにはいかない。だが、かくして私の当初の窮境はますます厄介なものになる。伝記作者である私が、こんなつましく、とらえどころのないこの主人公にとって、一編の小説だつてもしかすると不必要かもしれないと考えているのに、二編も引つさげて現われればどんなことになるだろう、私のかかる向こう見ずな振舞いをどのように釈明すべきだろう？

これらの問題の解決に思いあぐねて、私は何一つ解決しないまま、放っておくことにする。もちろん、慧眼な読者は、私がそもそもの最初からそのつもりだつたことを、もうとうに見抜いており、何だつて空疎な言葉をあだに重ね、貴重な時間を空費しているのかと、ただ私に腹立たしい思いをされているだろう。だが、この点についてなら、もうきちんと答えられる。私が駄弁を弄し、貴重な時間を空費したのは、第一に礼儀おもてなしを慮つてのことであり、第二に、だつてあらかじ

めおことわりしておいたじゃありませんかと言いわけをしようというずるい魂胆からである。もっとも、私は、自分の小説が《全体としては本質的に不可分であるにもかかわらず》、おのずと二つの物語にわかれたことを、むしろ喜んでさえいるほどだ。第一の物語になじんだからには、第二の物語を手にするに値するかどうかは、もう読者自身が判断するだろう。もちろん、誰一人、何の束縛を受けているわけでもないの、第一の物語の最初の二頁で本を放りだし、それより先は開かなくともいっこうにさしつかえない。しかし、公平な判断を誤るまいとして、必ずや最後まで読み通そうといういはたつて心優しい読者もなかにはいるのであり、たとえば、わがロシアの批評家は揃いも揃ってそうなのだ。このような読者が相手なら、やはり当方もだいたいぶ気が楽である。彼らの几帳面で良心的な心構えはともかく、それでもやはり小説の最初の挿話で物語を放りだしてもまったくさしつかえないような口実を与えておく。序文はこれで終わりである。こんなものはあらずもがなだという意見に、私もまったく同感だが、すでに書いてしまった以上、このまま残しておくことにする。

では、さっそく本題に入ろう。

第一部

第一編 ある家族の歴史

1 フョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフ

アレクセイ・フョードロヴィチ・カラマーゾフは、わが郡の地主フョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフの三男だった。フョードル・パーヴロヴィチはちょうど十三年前に悲劇的で謎めいた最期をとげたことでもかつてその名が広く知られていた（今でも当地では人々の口の端にのぼるほどだ）が、その最期についてははしかるべきところで語ることにしよう。今のところは、この《地主》（生涯ずっと自分の領地でほとんど暮らしたことがなかったのに、当地では彼は《地主》と呼ばれていた）について、奇妙なやつではあったが、かなり頻繁に見かける部類の、やくざな放蕩者であるばかりか、同時に分別のかけらもない人間だったということ、だが、無分別なわりには、自分の財産上の諸問題の処理にかけてはたいへんな才覚があり、どうやらそれしか能はないといった輩の一人だったと言っただけにとどめておこう。たとえば、フョードル・パーヴロヴィチはほとんど裸一貫から出発し、地主といえども取るにたりない小地主だったので、よその食卓でお相伴にあずかろうと駆けずりまわったり、居候を決めこもうと機会チャンスを窺うかがってばかりであったが、その彼がいざ亡くなってみると、現金で十万ルーブリに及ぶ財産を遺していたのだ。それでいて、やはり彼は一生涯ずっと、わが郡全体を見渡せどもめったにお目にかかれない、およそ分別のかけらもない非常識な人間の一人だったことに変わりはない。もう一度繰り返すが、これはばかではない。この種の非常識な輩はたいがい小賢しく、奸知に長たけていたりもする、

——つまり、この分別の欠如というのが、何やら独特の民族的なものなのである。

彼は二度結婚し、三人の息子があつた。長男のドミトリー・フォードロヴィチが最初の妻の子で、あとの二人、イワシとアレクセイが二度目の妻の子である。フォードル・パーヴロヴィチの最初の妻は、かなり裕福な名門貴族で、同じく当郡の地主であるミウソフ家の出だつた。持参金つきで、しかも美人、おまけに、昨今の世代でこそ珍しくもないが、一世代前にももうぼちぼち現われ始めていた、才気煥発で聡明な子女が、当時みながら《できそこない》⁽²⁾呼ばわりされていたちんけな男と、いったいどうして結婚するような羽目になつたのか、くどくどしく説明しようとは思わない。現に私は二昔前の《ロマン主義》の世代⁽³⁾に属するある娘を知っているが、彼女などは一紳士に数年にわたつて不可解な愛を捧げたあげく、いつでもしごく平穩無事に結婚できたのに、みずから乗り越えがたい障壁をあれこれつちあげて、嵐の夜に、いかにも断崖絶壁といった趣の、高い崖から、かなり深く流れる急な川に身投げして、まったくみずからの気まぐれから身を滅ぼしたのだが、それもこれもシェイクスピアのオフィーリアにあやかりたい一心だつたのだ。彼女がずっと以前から目をつけていた、お気に入りのその絶壁があれほど絵に描いたように美しいものではなく、そのかわりにありふれた平らな岸辺にすぎなかつたなら、おそらく自殺などまるきり起こらなかつたはずである。これは実話だが、わがロシアの現実では、ここ二、三代の間こんな事件や、これに類する事件が少なからず起こつたものと考えなければならぬ。これと同様に、アデライーダ・イワーノヴナ・ミウソフの所業も、疑いもなく、外来思潮の余波であり、やはり囚われの思考の高ぶりのなせるわざだつた。ことによると、彼女は女性の自立を宣言して、社会の因襲に異を唱え、親族や家族の専横に反旗をひるがえしたかつたのかもしれない。あるいはまた、フォードル・パーヴロヴィチなど、実際には単なる性根のねじくれた道化にすぎず、それ以上の何者でもないというのに、彼女はおせっかない幻想にそそのかされて、彼が居候の身分に甘んじているものの、あらゆるより良きものをめざすあの過渡期の、すべてをせせら笑うもつとも大胆不敵な人間の一人なのだと、たとえばほんの一瞬にせよ、思いこんだのかもしれない。おまけに何より刺激的だつたのは、駆落ちで決着をつけるという点であり、これに彼女はすっかり心を奪われてしまつたのだ。一方、フォードル・パーヴロヴィチの方は、社会的境遇からしても、当時、この種の突拍子もないできごとならば何にでも勇んで飛びつく心づもりができていた。なぜなら、手段は何であれ、一旗あげようと躍起になつていたのである。名門の一族にもぐりこんで、持

参金までせしめるというのは、まったくもつて心躍ることではないか。お互いの愛はどうかと言え、どうやら、花嫁の方にもなければ、アデライーダ・イワーノヴナの美貌にもかわらず、彼の方にもまるきりないようだつた。そんなわけで、生涯ずっと稀代の色情狂で通し、女がただ秋波を送りさえすれば、どんな相手であれ、ただちにその腰に手をまわしかねなかつたフォードル・パーヴロヴィチの人生において、もしかすると、この場合はある意味で唯一の例外かもしれない。実際、ただ一人、この女性だけが性的な面で彼にとくにこれといった感銘を与えなかつたのである。

駆落ちしてまもなく、アデライーダ・イワーノヴナは自分が夫を軽蔑しているだけで、それ以外には何の感情も持ちあわせていないことをただちに悟つた。かくて結婚の結果は瞬く間に明らかになつた。家族の方ではかなり早めに事件に見切りをつけ、家出娘に持参金をわけてやりさえしたのに、夫婦の間には乱れに乱れた生活が始まり、四六時中悶着が絶えなかつた。その際、若妻はフォードル・パーヴロヴィチとはくらべものにならないほど上品で高潔な態度を示したという話だつた。彼は、今では周知のことだが、当時彼女が二万五千元に及ぶ持参金を受け取るや、一度にそっくり巻きあげてしまつたので、その大金はそれ以来、彼女にとつて水底に沈んだも同然になつてしまつた。同じく嫁資として彼女がもらつた小さな村と、町はかなり立派な邸宅も、何やら適当な証書を作成して自分の名義に書き換えようと長い間、彼は全力を傾けた。夫は恥知らずな強要と懇願をのべつ繰り返しては、妻の心に彼に対する軽蔑や嫌悪の念をかきたてており、妻は妻で、ただうるさくつきまとわないうで放つておいてほしいという精神的疲労を感じていたもので、それ一つからしても、おそらく彼は目的を達したに違いない。だが、幸いなことに、アデライーダ・イワーノヴナの一家が口を挟んで来て、盗人に待つたをかけた。夫婦の間で取っ組みあいの喧嘩が始終起こつたことはひじょうに有名な話だが、漏れ聞くとくところは、殴つたのはフォードル・パーヴロヴィチではなく、アデライーダ・イワーノヴナの方だつたらしい。彼女は激しやすく大胆不敵な、色の浅黒い、気短な女性で、並はずれた体力に恵まれていた。結局、彼女は家を捨て、フォードル・パーヴロヴィチの手に三歳のミーチャを残して、貧乏暮らしに朽ちかけていた神学校⁽⁴⁾の教師と手に手をとつて、彼のもとから出奔した。フォードル・パーヴロヴィチはたちまち家を一大ハーレムに変えて、飲めや歌えやの放蕩三昧を繰り広げるようになり、その幕間には県のほとんど全域に乗りつけては、当たり前かまわず誰にでも自分を捨てたアデライーダ・イワーノヴナのことで涙ながらの愚痴をこぼし、あまつさえ夫として口の端にのぼすのも恥づかしいような